

植物、とくに蒲葵やマーニ(クロググ)の神名は御嶽の神名約八六〇のうち九一が認められる。一部研究者がこれは「真の神名」ではないとしたが、拝所の地物をとって名称にした御嶽の神名が、原初的祭壇である中心の構成物がそのまま祭祀中心の象徴によってコスモロジーを支えるものを指し示しているのだと把握すると極めて興味深い連鎖が見えてくるのであり、「真の神名」として理解したほうがよりその意味世界が整合性をもっていることがわかる。珊瑚石灰岩石やクバやマーニなどは神話的世界、クバヌハユーという世界の始まりに深く連関するものであり、始原的存在論ともいえるべき、世界が存在することと生成の原理を表象するものとして把握されているともいえる。クバ・マーニといった植物の中心の象徴は、女性、生産、豊穡、月、潮・海、死・再生、不死といったものへ連続していく。

北方の狩猟民族の狩人がシャマンの仲介を経なくとも動物の精霊との直接交渉(インコンゼなど)を行うことなどから動物と人間の「初源的同一性」があることが指摘される。このような人間理解、動物理解は環境世界において長期の持続のなかで構築されてきたものといえるが、琉球・沖縄の宗教伝統においても、島嶼的風土のなかで持続的に維持されてきた世界の理解があったというべきである。その一つとして、人間と植物の、初源的同一性とまではいかずとも、少なくとも「初源的連続性」とでもいえるべき一元的意味世界があるのではないかと考える。

『琉球国由来記』では、村落の御嶽における祭祀の中心目的が五穀の豊穡にあることがわかるが、農耕のつつがない運行

は、御嶽を中心とした植物のシンボリズムと霊威によって支えられていた。それゆえ、その霊威の源泉となる御嶽の神名が樹や植物、自然物がそのままそれとなるのは「初源的連続性」をもとにすれば、むしろ当然といえる。

聖地御嶽の様態の不変性は、王権の権威の象徴体系を維持する重要な中心であるため、王府の巫女組織により厳重に管理されていた。各村落の生産に適した地勢空間と聖地は分かちがたく結びつき、王朝の共同体のエコノミクスとふかく連関していたのである。共同体のエコノミクスが大きく変容した今、かつての聖地がそのどのような意味の組み換えのもと中心性の維持に関連しているのが問題となる。

琉球風水の装置としての村獅子について

鈴木 一馨

およそ風水にかかる事象を語る際、「風水」と一言で済まされることがまま見られる。しかし、他の諸事象と同様に、風水にも時間的・地域的相違があることは言を俟たない。これを解明するためには、丹念に風水の史的状况を明らかにする必要がある。

沖縄の風水においてもそれは同様であり、旧琉球王府の主導により琉球全域において行なわれ、現在も影響を与え続けている沖縄の風水(琉球風水)を、一言で「風水」で片付けることは、その実状や史的状况を見る限り難しいと言える。

琉球風水における特徴的な装置に「抱護」がある。これは福建にて地理を学んだ蔡温が、乾隆二年(一七三七)に編纂した

『杣山法式帳』によって提示したもので、当初、山林・農地の保護装置であったものが、後に集落・住居の保護装置に転用されたものと考えられる。その構造は、山林によって該空間を囲繞するというもので、これによって該空間に溜まった「気」の漏出を防ぐというものである。現在、沖縄の集落立地あるいは空間構造を説明する際に、しばしば集落を囲む構造として「抱護」に言及されることがあり、一般的な構造と見られている嫌がある。

しかしながら、沖縄本島における抱護の史的な分布域は北部の山原にほぼ限られており、これを琉球風水の一般的な集落保護の装置と見なすことはできない。

一方、南部には「村獅子」「石獅子」と称される集落保護の装置が見られる。これは、『球陽』尚貞王二十一年(一六八九)の「始建獅子形、向八重瀬嶽、以防火災」条に記され、八重瀬町富盛に「富盛の石彫大獅子」として現存するものを初例とする。同記事によれば、富盛集落に火災が頻発するので、村人の請いにより唐栄の蔡王瑞が風水を見たところ、集落の直近に聳える八重瀬嶽が火の性質を持つ「火山(ヒーザン)」であり、その災いを防ぐため八重瀬嶽に向けて設置させたところ。各集落の村獅子設置の意図では、火山である八重瀬嶽の災いを防ぐために設置されたものが多く、八重瀬嶽を直接に視認できない集落でもその目的のために設置されている場合がある。また、八重瀬嶽に限らず、その他の山丘でも火山に充てられたり、あるいは向かい合う他集落との関係が悪かったり、そのような場合でも災いを防ぐために設置される。この災いを防ぐことを、特

に返し(ケーシ)と呼んでいることから、村獅子はこれによって災厄(の原因である害気)を反転もしくは反射させて、該空間への侵入を防ぐ琉球風水の装置だと理解することができる。

この存在に注目し、村獅子の分布を丹念に調査した長嶺操は、各集落における村獅子の個数に地域的な傾向のあることを見出し、「一体型」「二体型」「多数型」と分類している。ただし、現地調査をしてみると、長嶺の見落とした村獅子を発見することがあり、長嶺の数量分類は再検討する必要がある。

また、琉球風水史の観点からは、蔡温によって琉球風水の体系が改編されたと理解され、村獅子は蔡温以前の琉球風水の体系を示すものとして注目できる。それと同時に、抱護が北部で、村獅子が南部で、琉球末期まで新設がされていたことから、蔡温による風水の体系改編がどの程度のもだったのかを知る重要な手掛かりになると考えられる。

なお、本発表は平成二十一―二十三年度科学研究費補助金基盤研究(B)「沖縄の集落空間における伝統的人工林『抱護』の形態と機能に関する研究」(課題番号二一三六〇三〇〇。研究代表者、浦山隆一)、平成二十二―二十四年度科学研究費補助金基盤研究(B)「沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見る集住環境の構成原理に関する研究」(課題番号二二三六〇二五七。研究代表者、鎌田誠史)による研究成果の一部である。